

相模・武藏における山林寺院の様相について －瓦塔と瓦を中心に－

高橋 香

はじめに

近年、県内の瓦塔出土事例の増加している。瓦塔出土の遺跡から出土する瓦が「御殿山瓦窯」を産地とする傾向にあり、瓦と瓦塔の生産体制に何か関係性がみいだせるのではないかという推測が筆者自身の中でたてられた。

前回の論考の中で、御殿山瓦窯の生産体制について、瓦生産は各旧国内単位で需要・供給の生産体制が完結する事例が比較的多い中、相模国は生産窯が少ないとから隣国・武藏国の生産システムを利用しながら瓦を国内に流通させていたことを指摘した（高橋2014）。相模国内は窯が築造できない土地柄というわけではなく、古くは宗元寺や相模国分寺に供給していた三浦半島を中心とした御浦郡の乗越瓦窯や公郷瓦窯が、千代磨寺に供給していた足下郡内のからさわ瓦窯が操業していたことを考慮すると、窯が存在しない理由は別にあるのだろう。

御殿山瓦窯の瓦については、県内でもいくつか出土事例があるが、厚木市所在の山林寺院に想定されている鐘ヶ嶽（以下、鐘ヶ嶽廃寺と記す）（註1）から軒丸瓦が2点採集され、そのうち1点は千代磨寺、御殿山瓦窯と同範瓦であった（加藤・富永2000）。残る1点は素弁の文様構成で、胎土から見て御殿山瓦窯産の軒丸瓦であると想定されたが、武藏国分寺・尼寺の再建期で使用された瓦と同範であることを確認した（高橋2017）。この他にも、鐘ヶ嶽廃寺のような山林寺院とされる日向薬師（宝城坊）からも御殿山系の素弁の軒丸瓦が発見されており（註2）、丹沢山系の同じ尾根筋沿いに御殿山瓦窯産の瓦が供給される寺院が展開していた様相がみられるようだ。

「御殿山瓦窯」という言葉をキーワードに、瓦塔の分布と御殿山瓦窯を産地とする瓦との関係性、そして、御殿山瓦窯を産地とする瓦の分布が山林寺院を中心にみられる原因について、追求したい。

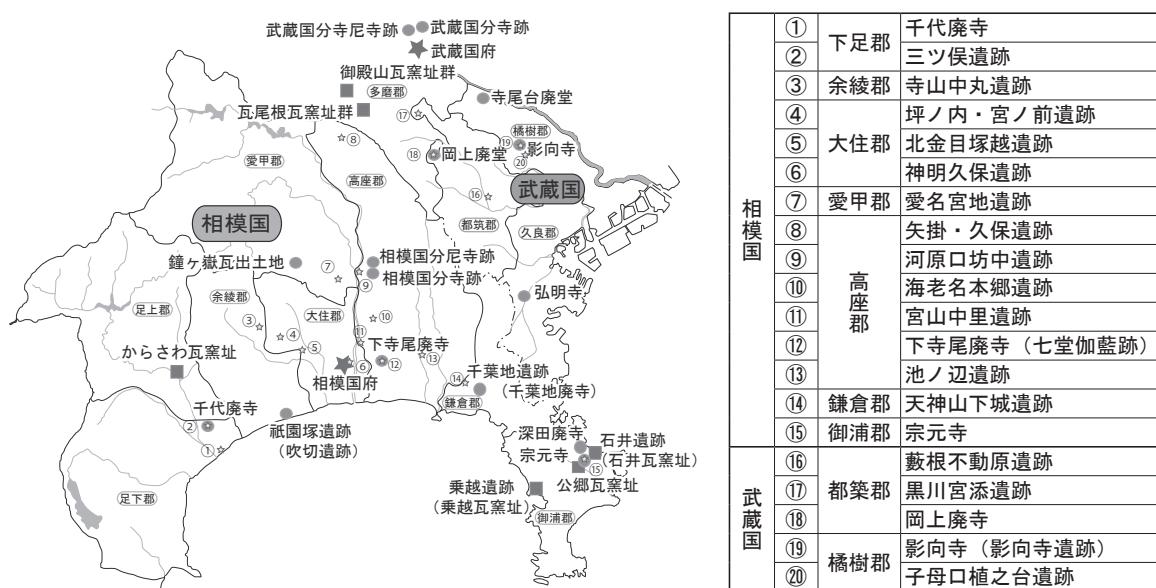
なお、対象エリアは神奈川県内とし、古代律令期の国名で示すならば相模国と武藏国（南武藏地域）となる。

1. 瓦塔の先行研究について

2000年に「考古学から古代を考える会」や「神奈川県考古学会」において仏教系の遺物を集成してから17年が経ち（考古学から古代を考える会2000・大坪2000）、神奈川県内の瓦塔の出土事例が当時12ヶ所であったが19ヶ所に増加した（第1図）。

瓦塔の年代観については、先行研究として関東地方出土の瓦塔の編年的位置づけについて整理した池田氏の分類が代表的である。内容は、瓦塔の大別として丸瓦部のみを表現するAタイプと、丸瓦と平瓦の両者を表現するBタイプがあるとした石田氏の分類があり（第2図 石田1997）、それを受け池田氏が屋蓋部の瓦表現と垂木表現によって10型式に分類し、それぞれに年代観があてられた（第3図 池田1999ほか）。

Aタイプ瓦塔の最古の事例は多武峰類型瓦塔で8世紀初頭～前葉、ついで萩ノ原類型、大仏類型（8世紀後葉～9世紀初頭）があり、東山類型瓦塔（8世紀末葉～9世紀前葉）、宮ノ前類型瓦塔（9世紀前葉）、上西

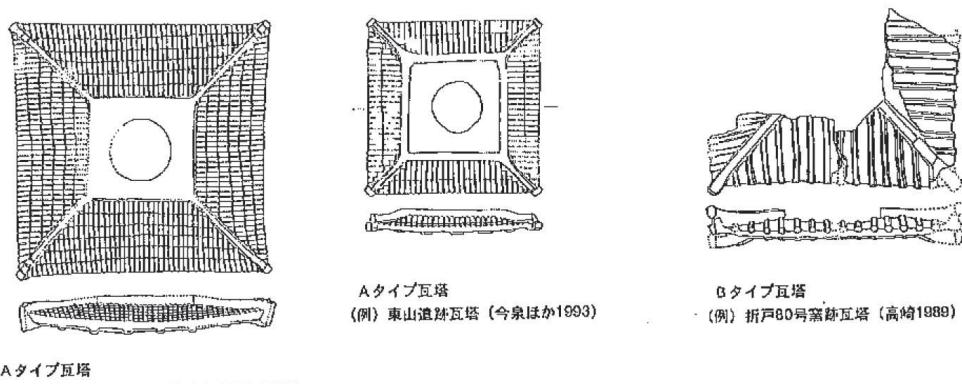


第1図 神奈川県内瓦塔出土位置図と官衙、古代寺院、生産遺跡位置図

原類型瓦塔・柳原類型瓦塔（9世紀中葉）、東郷台類型瓦塔（9世紀中葉～後葉）と続いている（第3図）。Bタイプの瓦塔は勝呂型類型が8世紀前葉～中葉、姥田類型瓦塔が8世紀後葉～9世紀初頭、という年代観があてられている。

池田氏の屋蓋を中心とした瓦塔の編年以前に、軸部の組み物（斗棋）の変化によって瓦塔の編年が構築さるとする高崎氏の見解がある（高崎1989）。同様に永井氏も、軸部の組み物を主として粘土板と粘土帯で表現される技法によって編年が組めるとし、形態や製作技法上の特徴を抽出して猿投窓型瓦塔を設定した（永井2005）。そして、8世紀前半の段階において、猿投窓型の祖型となる瓦塔が尾張・三河等に分布することから、その模倣ないしは製作技術が東海道を通じて関東へと伝わったという見方を提示している。

屋蓋部製作技法のみならず、軸部製作技法や斗棋表現技法も含めた分析を行ったのは坂田氏である（坂田2009）。坂田氏は、関東地方と他地域出土資料の比較検討を行い、「製作技法」「表現手法」が変化する段階において、適宜瓦塔制作者によって情報や技術の取捨選択がなされていることを明らかにした。そのほか、瓦塔の生産と供給の問題についても言及し、群馬県の事例をモデルケースとして、瓦塔の造立者層は郡領層を中心と

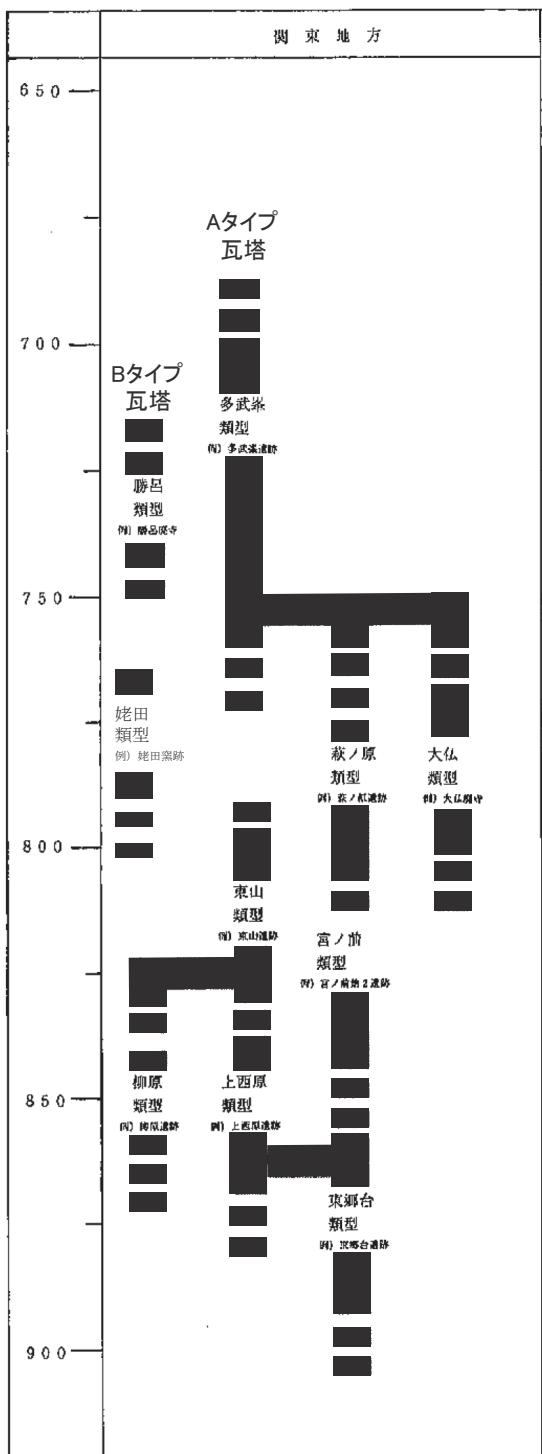


第2図 瓦塔屋蓋部の分類

しながらも、時には郷長層にまで及んでいた可能性を指摘した。

瓦塔が出土する遺跡の評価に関しては、いくつかの見解がある。まず池田氏は①寺院、②聖地（丘陵頂部）、③集落遺跡（村落内寺院）の大きくわけて3パターンの瓦塔出土遺跡に分類されるとしている（池田2004）。②の聖地としている瓦塔については、集落域とは隔離された場所から単独で出土している様相から、山岳信仰との関わり、神仏習合との関連が強いとし、瓦塔そのものが信仰対象物であったとしている。

集落遺跡から出土する瓦塔については、8世紀代の瓦塔が出土する集落は、9世紀代の開発集落の先駆けと



第3図 瓦塔編年

して山野河海の開発・領有との関わりがあったとし、9世紀代の瓦塔が出土する集落は、台地中央、山地・丘陵域、低地、扇状地端の微高地に形成された遺跡、つまり開発が及ばなかった地域にも遺跡が形成されていったとしている。山野開拓を積極的に行った富有層たちが宗教的なモニュメントを造立、山野領有を仏教的世界観によって正統化したのが瓦塔であるのは、と指摘した。また、8世紀代の瓦塔は木造塔模倣タイプであったものが、9世紀代になると仏塔形表象タイプへモデルチェンジしたとし、瓦塔造立者の意図について言及している。

次に笹生氏は、瓦塔は寺院のみではなく、丘陵内や集落遺跡から出土しており、その様相は安置された環境・状況により造立意図が異なり、信仰内容を一律に考えることは難しい、としながらも瓦塔が安置されていた特徴的な景観を復元し、教典に説かれた内容との比較検討を行った。

瓦塔が立地する景観は、①集落縁辺の出入り口、②丘陵頂部、③墓域の3パターンがあり、これらの瓦塔は、郡司層以外の新興勢力を含めた地域の有力者が、宗教的な権威を得る手段の一つとして、滅罪の為の瓦塔の造立・安置が位置づけられた、という見方を提示している（笹生2012）。

尾張国と三河国出土の瓦塔について検討した永井氏は、瓦塔造立遺跡には、寺院遺跡、集落遺跡の2パターンがあるとし、寺院出土の瓦塔は伽藍中枢に造立、集落遺跡については、集落開発に伴う古墓への弔いが目的であろうとしている（永井2013）。特に尾張国では、瓦塔は古墳時代の墳墓群や弥生時代の周溝墓群が立地したいわゆる墓域から、8世紀後半以降も集落へと変容する地域において出土する傾向がある。すなわち、在地豪族の墓域が、在地と系譜関係がない国司の生活域へ改めて造られる中、「鎮魂

の瓦塔」として造立されている可能性を指摘している。一方、三河地域では、墓域を壊してまでの瓦塔造立集落はなく、同じ東海地域であっても異なる様相がみられるとしている。東海地域の瓦塔造立集落遺跡は、瓦葺き建物が伴う、という事例があり、興味深い。

三者の瓦塔造立遺跡についてまとめると、大きくは①寺院・官衙、②集落遺跡、③丘陵頂部などの聖地の3つに分類されるだろう。いわゆる村落内寺院に分類される遺跡からの出土事例は、主要堂塔などが立ち並ぶ寺院とは別であり、集落遺跡に含まれる。上野国の三原田諏訪上遺跡や三河国の真福寺遺跡の事例のように、集落遺跡内に瓦葺き建物があり、その中に瓦塔の造立が想定される遺跡は、県内事例では少ない。古代寺院以外の集落遺跡から一定量の瓦の出土が認められる事例は尾張同様相模でも確認されるが、一堂程度の小規模寺院が乱立していたとされる尾張国とはまた異なる（梶原2012）。

また、瓦塔造立遺跡として「山林寺院」という位置づけがこれまでの研究では少ないが、尾根（丘陵先端）上から出土している瓦塔は山林寺院出土事例として扱えるのではないだろうか。山林寺院としている遺跡から瓦塔が出土した事例は福井市の明寺山廃寺がある（古川2012）。明寺山廃寺は丘陵頂部の標高55～63mに位置する遺跡で、本堂、脇堂等が確認されている。瓦塔は脇堂から出土し、その脇堂が瓦塔を安置した塔院の可能性があるとしている。また、三河・遠江の大知波峠廃寺に近接する宇志瓦塔遺跡も瓦塔が出土したことで知られ、周辺の踏査から山林寺院が想定されている（後藤2007）。

武藏の甘粕山遺跡群東山遺跡は、標高95mの丘陵頂部にあり、堅穴住居群から離れた地点で瓦塔と瓦堂が発見されている。丘陵頂部という場所を意識していると笛生氏は述べており、丘陵頂部は「神聖な場」として認識される。山林寺院は聖地とする丘陵頂部等に立地していることを考慮すると、立地などからみて同様な範疇なものと捉えることができるだろう。よって、瓦塔造立遺跡は①寺院・官衙、②集落遺跡、③山林寺院を含む丘陵頂部等の聖地の3パターンに分類可能かと思われる。

2. 瓦塔の県内出土事例について

今回出土事例としてあげられる19遺跡の事例について、全国的にみると3パターンあるが県内事例を概観すると①寺院・官衙、②集落遺跡の2つに分類される。それぞれ詳細をみていくことにする。

〈古代寺院・官衙の事例〉

古代寺院からの出土事例は、宗元寺、千代廃寺、下寺尾廃寺（以上相模国内）、影向寺、岡上廃堂（以上武藏国内）と、いわゆる初期寺院から出土している。それには、須恵質、土師質のものがあり、瓦塔の製造年代、及び使用された時期にもばらつきがある。以下、詳細にみていこう。

宗元寺は、御浦郡内に所在する相模最古の古代寺院である。伽藍配置の詳細はまだ確認されていない。周辺で採集された瓦の中に大和・西安寺と同范瓦がみられることから、創建時期を7世紀後半として考えられているが、創建の時期についての詳細は不明である。出土している瓦塔片は2点あり、1点は平瓦部と丸瓦部を組み合わせたBタイプ瓦塔で小片ではあるが、須恵質の良好な資料である。池田分類の勝呂類型と考えられる。もう1点は土師質で、屋蓋部を表現したものである。池田分類の上西原類型に相当する。

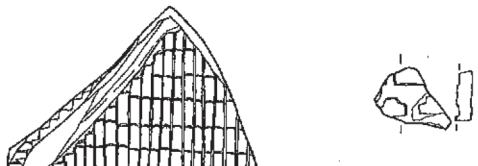
千代廃寺は足下郡に所在する古代寺院で、近年の調査事例から7世紀末～8世紀第1四半期を造営期とし、瓦の時期からみて靈龜年間から天平初年（715～729年）の寺院として比定されている（大島他2000、河野1993）。主要堂塔はまだ知られていないが、掘り込み事業が確認され、金堂とみられている。出土している瓦塔は、屋蓋部や基壇、斗拱部が残存しており、特に屋根蓋部の降り棟部分と軒先が良好に残存している。須恵質のもので、軒先は竹管で垂木か軒丸瓦を表現したような押印が見られる精巧なつくりである。池田分類の萩ノ原類型の表現と同様であると考えられる。

相模・武藏における山林寺院の様相について

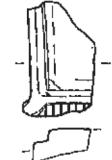
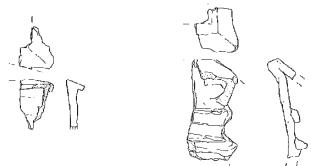
<宗元寺>



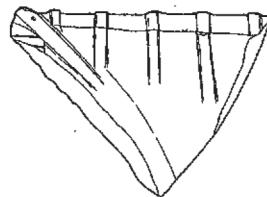
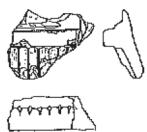
<千代庵寺>



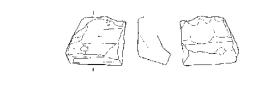
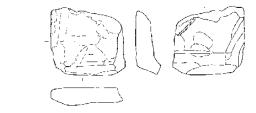
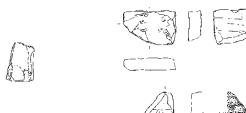
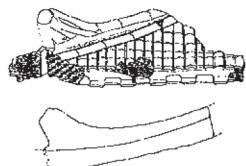
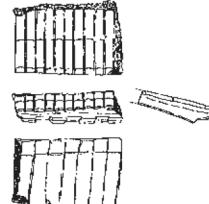
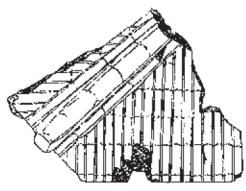
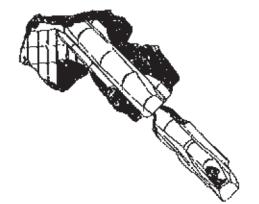
<下寺尾庵寺>



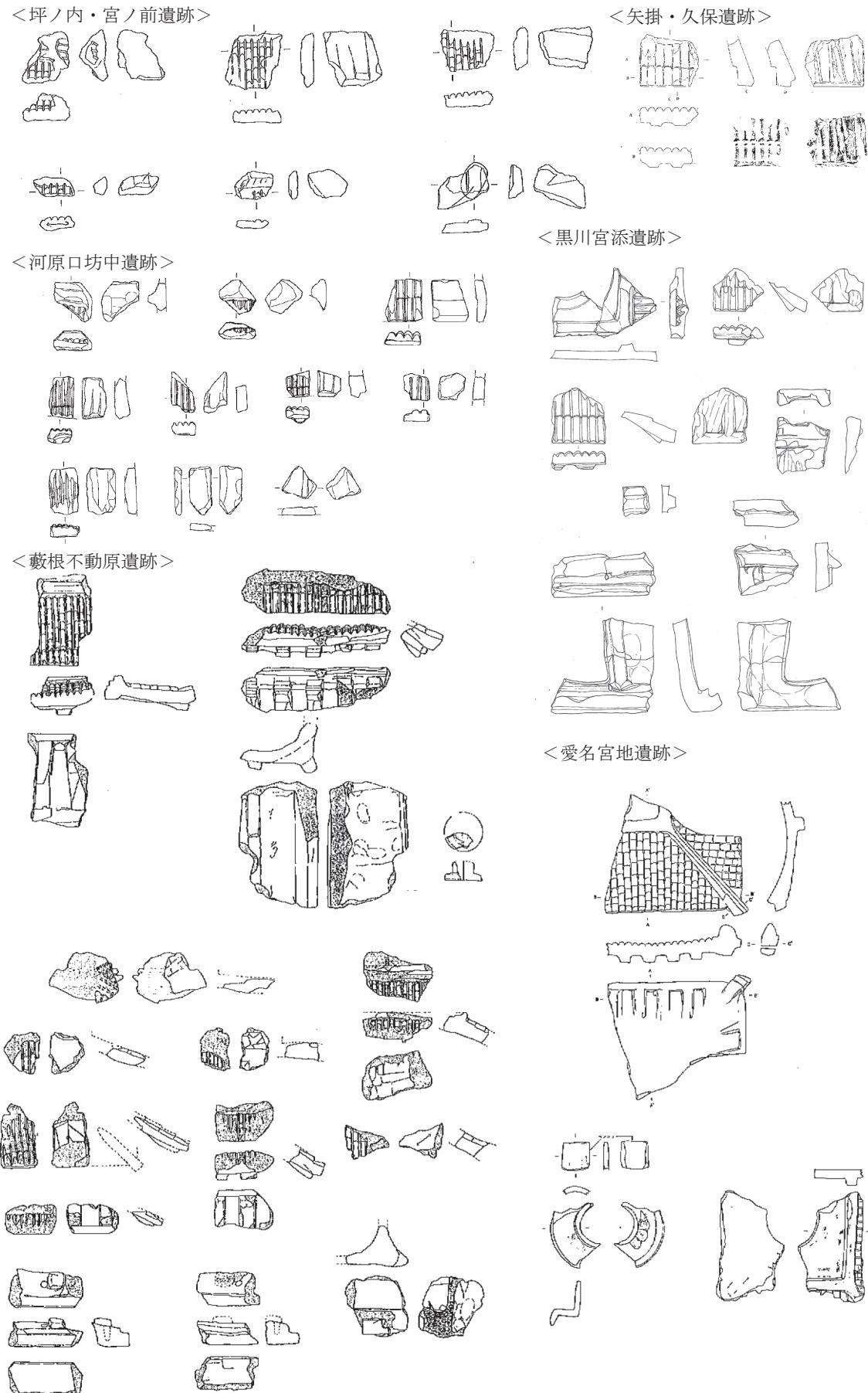
<影向寺>



<神明久保遺跡>



第4図 県内寺院・官衙出土の瓦塔 (S=1/6)



第5図 県内集落遺跡出土の瓦塔 (S=1/6)

相模・武藏における山林寺院の様相について

第1表 県内出土瓦塔類型・時期一覧

番号	郡	遺跡名	瓦塔の類型	年代
①	足下郡	千代廃寺	萩ノ原類型	8世紀前～中葉
②		三ツ俣遺跡	宮ノ前類型・類型不明	8世紀末～9世紀前葉
③	余綾郡	寺山中丸遺跡	類型不明（基壇部分残存）	9世紀代か
④	大住郡	坪ノ内・宮ノ前遺跡	東郷台類型	9世紀中葉～後葉
⑤		北金目塚越遺跡	東郷台類型	9世紀中葉～後葉
⑥		神明久保遺跡	大仏類型	8世紀後葉～9世紀初頭
⑦	愛甲郡	愛名宮地遺跡	宮ノ前類型～東郷台類型	8世紀末～9世紀前葉
⑧	高座郡	矢掛・久保遺跡	上西原類型	9世紀前葉～中葉
⑨		河原口坊中遺跡	東山類型～上西原類型	8世紀末～9世紀中葉
⑩		海老名本郷遺跡	宮ノ前類型	8世紀末～9世紀前葉
⑪		宮山中里遺跡	類型不明（露盤部分残存）	8世紀代か
⑫		下寺尾廃寺（七堂伽藍跡）	類型不明（斗拱部分残存）	8世紀末～9世紀前半か
⑬		池ノ辺遺跡	東郷台類型	9世紀中葉～後葉
⑭	鎌倉郡	天神山下城遺跡	上西原類型	9世紀前葉～中葉
⑮	御浦郡	宗元寺	勝呂型・上西原類型	8世紀前葉～中葉・9世紀前葉～中葉
⑯	都築郡	藪根不動原遺跡	東郷台類型	9世紀中葉～後葉
⑰		黒川宮添遺跡	上西原類型	9世紀前葉～中葉
⑱		岡上廃寺	類型不明（報文のみ）	—
⑲	橋樹郡	影向寺（影向寺遺跡）	上西原類型	9世紀前葉～中葉
⑳		子母口植之台遺跡	東山類型～上西原類型	8世紀末～9世紀中葉

※瓦塔の分類は池田1999の分類による。

下寺尾廃寺は、高座郡に所在する古代寺院で、台地上に高座郡衙がある。下寺尾廃寺では現在までに金堂、講堂、区画施設等が確認され、発掘調査や瓦の時期からみて、7世紀末～8世紀初頭を創建とする寺院として位置づけられている。瓦塔は、斗拱部2点と屋蓋部の丸瓦1点が出土した。土師質の焼成で、砂粒を多く含む胎土である。

屋根は粘土を折り曲げ、斗拱の表現は粘土紐を貼り付けて表している。これは池田分類の東山類型の組物の表現に類似する。瓦塔は伽藍域の区画を壊す竪穴住居跡から出土している。

影向寺は、武藏国でも南にあたる地域の中核寺院として位置づけされる古代寺院で、既存の調査において金堂・塔・講堂等が確認されている。創建は、発掘調査や瓦の様相からみて7世紀後半を創建と考えられている。出土した瓦塔は、屋蓋部の一部で、丸瓦と軒先が残存する。土師質で焼成はやや軟質である。

堂塔がみられない寺院址から瓦塔が出土している場合、堂塔の代用品として扱ったといわれているが、相模国内の寺院の場合、主要堂塔が明確に確認されていない事例が多く、判断が難しい。豊田市舞木廃寺では、瓦塔が出土しているものの、陶製相輪部や塔心礎があるため、8世紀代には木造塔が造立していた可能性が高く、瓦塔が木製造塔の代用品というより方は限定できないと指摘されている（永井2013）。下寺尾廃寺からも陶製相輪が出土しているため、木製塔ないしは相輪塔のような塔が想定されるが、出土した瓦塔が堂塔の代用品であったかという判断は難しい。それぞれの古代寺院からは御殿山瓦窯産の瓦が出土しているものの、瓦塔と共に伴する事例ではない。

次に官衙に該当する遺跡の事例をみてみよう。神明久保遺跡はいわゆる相模国府域に該当するエリアの遺跡であるが、同遺跡からは、須恵質、土師質の2種類の瓦塔が確認されている。いずれも焼成がよく、屋蓋部は

降り棟の瓦の表現も丁寧な沈線による区切りがみられる。斗拱部の表現はヘラ状の工具で巻斗部分を造作している。これらの特徴から池田分類の大仏類型に該当する。

神明久保遺跡からは御殿山産の瓦の出土事例はない。相模国府域全体で見ると、模骨文字瓦が出土している等、御殿山瓦窯から国府域への供給はあったようだが、瓦塔が出土している遺構とは共伴していない。

以上示した瓦塔は、寺院や官衙域から出土しているが、採集品が多くて出土位置が定かでない。出土位置がわかるものも、堅穴住居跡や堅穴建物等からであり、寺院の中核に瓦塔が立地していたかの判断は困難である。

〈集落遺跡の事例〉

集落遺跡の出土事例としては、三ツ俣遺跡、寺山中丸遺跡、坪ノ内・宮ノ前遺跡、愛名宮地遺跡、北金目塚越遺跡、池ノ辺遺跡、河原口遺跡、本郷遺跡、宮山中里遺跡、矢掛・久保遺跡、天神山下城遺跡、(以上相模国内)、黒川宮添遺跡、藪根不動原遺跡、子母口植之台遺跡(以上武藏国内)から出土している事例がある。

以上あげた遺跡の中には、国分寺や郡寺のような伽藍配置が整った寺院ではなく、古代集落内に作られた本格的な伽藍をもたない「寺院」と想定される遺跡もあり、これらの遺跡を「村落内寺院(村落寺院)」として一般的に区別している。県内事例では、建物配置や、出土する遺物から愛名宮地遺跡・藪根不動原遺跡などは村落内寺院(村落寺院)として想定される。

集落遺跡から出土している瓦塔は小片が多いが、中には愛名宮地遺跡や黒川宮添遺跡のように基壇部や組物部、相輪部が明瞭にわかる破片もみられる。破片の多くは屋蓋部で、いずれも丸瓦のみを表現するAタイプ瓦塔が多い。丸瓦や軒の表現によって分類でき、屋蓋部以外のみの場合は時期や類型の判断が難しい。

屋蓋部以外が出土した事例あげられるのは、寺山中丸遺跡と宮山中里遺跡がある。寺山中丸遺跡は、標高204~207mの台地に立地し、瓦塔の他「油坏」と書かれた墨書き土器や、瓦、鉄滓、灰釉陶器、緑釉陶器などが出土した集落である(註4)。堅穴住居址や掘立柱建物址で構成される集落で、鉄滓の出土状況から小鍛冶のような鍛冶生産も想定される。出土した瓦塔は、基壇部分のみの残存であることから時期判断し難いが、土師質であることを考慮すると9世紀代の瓦塔として考えられる。

宮山中里遺跡は自然堤防に立地する集落で、堅穴住居址と掘立柱建物址で構成される集落である。出土した瓦塔は、正方形の須恵質の板状で、裏面には糸切り痕跡が明瞭にみられる。須恵質という材質から瓦塔の時期が8世紀代と推測できるが(註5)、こうした屋蓋部以外のみが残存している場合の時期決定は今後の課題である。

以上、寺院・官衙関連から出土する瓦塔、集落から出土する瓦塔の詳細についてふれた。次に神奈川県内で出土した瓦塔の傾向についてみていくこととする。出土した瓦塔をまとめたのが第1表で、瓦塔の分類基準については、池田分類に拠った。また、須恵質のものは8世紀代、土師質のものは9世紀代という池田氏による判定があり、小片や分類不可のものについては材質による時期判断をしている。

神奈川県内の出土事例は、宗元寺の8世紀前葉のものが最も古く、9世紀中葉~後葉の事例が多い。寺院・官衙から出土する瓦塔は主要堂塔等明確ではないが、瓦塔が存在することから塔などの代用品としてではなく、祈りの対象物として瓦塔が造立していたことがいえるだろう。

集落内から出土する瓦塔については主に9世紀代を主とし、その中で時代の上下はあるものの、御堂などの中に瓦塔が造立していた景観が想定される。遺跡の立地によっていくつかのパターンがあり、愛名宮地遺跡等のような谷戸に立地する場合は、谷戸開発に伴う集落内での信仰対象物として考えられるようである。天神山下城遺跡は丘陵の斜面地に立地するが、瓦や掘立柱建物址が密な遺構配置は近接する谷戸にみられ、ここも未開地の開発に際する谷戸開発の集落として考えられるだろう。藪根不動原遺跡や黒川宮添遺跡等のように丘

陵上に立地するが、丘陵先端部のような特別な地に立地していないものは集落内に立地する瓦塔の中に含めた。これらの集落も丘陵の地を開発するにあたり、信仰対象物を望んだ人々の造立と考えられる。寺山中丸遺跡は、山林開発の最先端地として集落が形成されたものと考えられ、善波峠を挟んで大住郡側には坪ノ内・宮ノ前遺跡が位置している。瓦塔が出土したのは溝状遺構からで、集落の中心地は出土した溝状遺構より南側に想定されている。この溝状遺構からは、鉄滓や轍の羽口などが出土しており、手工業生産との関係がうかがえ、谷地形開発に伴う集落であった可能性が高い。

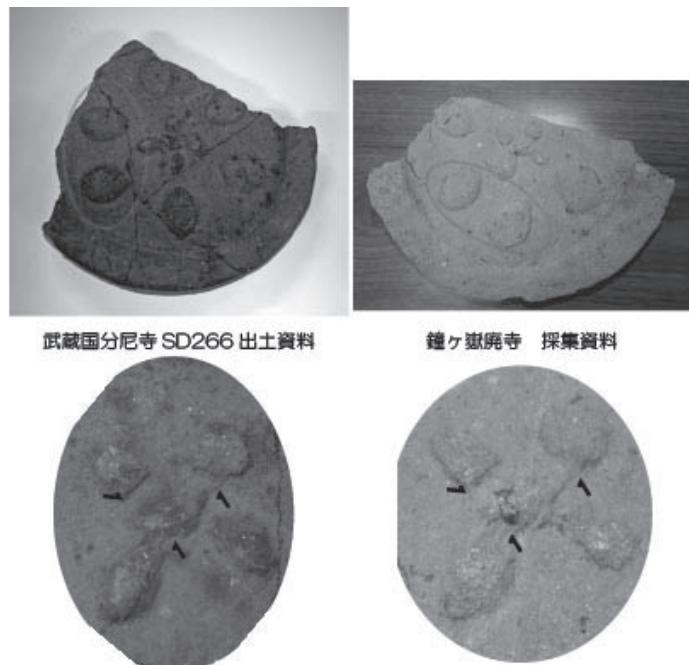
自然の畏怖の対象は山野だけに限ったことではなく、河川もまた対象だったのだろう。河原口坊中遺跡は自然堤防に立地する遺跡で、三川合流地帯で水上交通の要となる地である。低地の開発を進んで行った氏族の信仰対象の場として瓦塔を造立したのだろう。

瓦塔出土遺跡のうち御殿山瓦窯の瓦が伴うのは、寺山中丸遺跡、北金目塚越遺跡、藪根不動原遺跡、黒川宮添遺跡、池ノ辺遺跡である。集落が盛行する時期に瓦塔の造立があり、その時期は御殿山瓦窯の操業もピークを迎えており、それらの集落からは御殿山瓦窯と瓦塔に関係が見いだせる。

御殿山瓦窯の瓦は集落や平地寺院以外にもみられる。それが山林寺院である。

3. 山林寺院について

山林寺院とは、平地寺院と併用され、僧尼が仏教の拠点となる寺院で教典を学び、仏を礼賛供養等するため、山に籠もって法力を身につける場が山林寺院であるとしている（上原2011）。僧尼は、平地寺院と山林寺院を往来しており、こうした様相は仏教が伝来する時代にまでさかのぼる。日本においては7世紀後半に、平地寺院とネットワークをなしている山林寺院として近江・崇福寺がある。相模国内で山林寺院として考えられるのは、厚木市内に所在する鐘ヶ嶽廃寺である。鐘ヶ嶽は東丹沢に連なる山で、現在でも修験道の修行の場となる信仰対象の山である。東丹沢山地は大山から北へ向かう尾根上でそこに日向薬師（宝城坊）があり、鐘ヶ嶽、白山へと続く修験のルートとして知られている。前述したように、この尾根沿いに御殿山瓦窯の瓦が出土している。鐘ヶ嶽廃寺から軒丸瓦・丸瓦が採集されたことをきっかけとして、山林寺院の存在が想定され、近年、厚木市教育委員会による試掘調査が行われている。その結果、寺院を直接示すような遺構はなかったものの、平瓦や鉄滓がトレーナー下層部分より出土し、整地したような痕跡が確認されたなど、寺院の存在が裏付けされるような結果となっている（註6）。今までに確認されている軒丸瓦2点のうち一点は、御殿山瓦窯産で、千代廃寺と同範関係にあることは以前から知られていたが、残る1点については、御殿山瓦窯産に類似するものとして判断していた。その中で、武藏国分寺・尼寺の再建期に該当する軒丸瓦と同範であるこ



第6図 鐘ヶ嶽採集瓦と武藏国分寺・尼寺同范瓦

とを確認した。その根拠は、①同じ箇所に範傷があること、②瓦当面に現れている表面の木目の痕跡等という同様な特徴がみられることから同範と同定した（高橋2017）。山林寺院と国府・国分寺の同範瓦の事例は、全国的にみられる事例でもある。「白月は山に入り、黒月は寺に帰る」といったように、修行の場として往来があったことが指摘されていることは、解釈の裏付けとなろう（上原2002・須田2002）。

同範瓦が出土する背景の検討では、同国内間での同範関係であることが多い。今回、明らかにしたのは「武蔵」という隣国の武蔵国分寺同範瓦事例であり、また別の要因が考えられる。国を超えた事例としては、大和毛原廃寺と伊賀国分寺があげられる。毛原廃寺が伊賀国分寺に対する山林寺院として考えられており、国境に立地する事例として、大和に属する寺院ではあるが、同範瓦の出土状況から伊賀国府の瓦生産の管轄に組み込まれた事例はどうであろうか。

御殿山瓦窯は、南多摩窯址群中の一支群で、境川水系の相模国側から築造が開始された（鶴間2014）。その生産拡大に伴って分水嶺を超えて武藏側へ広がっていくことがうかがえる。操業開始は9世紀前葉とし、9世紀後半～10世紀前葉頃に生産のピークをむかえ、10世紀前半以降に終息する瓦窯址群である。瓦の他に須恵器も生産しており、その供給圏は南武藏から相模東部地域、甲斐方面までと国を越えて分布している。

『日本後紀』や『日本三大実録』には、甲斐国と相模国、河内国と和泉国といったような国境をめぐる争いの記事が掲載されているが、相模国と武藏国との間での争いの記事はない。争点の内容は、いずれも様々な資源に関しての領有を主張するもので、古代社会における利権が垣間みられる。相模と武藏は境川水系と多摩川水系の分水嶺である丘陵稜線が国境であり、両国の主要寺院へ供給する御殿山瓦窯が国境を間に入り組んだ支群構成がみられる。例えば、分水嶺の北側に位置している瓦尾根瓦窯が相模国分寺へ供給する瓦窯であり、分水嶺の南側にあるセイカチクボ瓦窯等が武藏国分寺へ供給している窯であったことがあげられる。このような環境が成り立っていたのは両国における友好的な関係が背景にあったことが想定される。それを裏付けるように、相模・武藏の間では、『公卿補任』で相模守であった大伴国道が武藏守に、武藏守であった藤原綱継が相模守に転任した記事が記載されており、両国の間では協調的な丘陵利用を可能にしていたことが指摘されている（深澤2015）。御殿山瓦窯を管理運営していたのは、この時期に国司と対等であった富豪層が主導したとみなされ、御殿山瓦窯は国境を越えて操業し、両国へ供給していたといえ、その広範囲操業は瓦窯の管理運営者に起因するところが大きい。しかし、瓦生産の指揮は、果たして富豪層クラスの人間が自由にとれるものなのだろうか。他国事例をみても、瓦当瓦、特に国分寺との同瓦については、瓦操業について国司の関与が想定されることが多く、御殿山瓦窯においても同様に考えられるだろう。

9世紀中葉以降という時期は、武藏国分寺の再建期の時期であり、武藏国分寺や尼寺の僧や尼僧の山林修行の場として、遠く離れた鐘ヶ嶽廃寺、日向薬師（宝城坊）が新たに設けられたのではないだろうか。信仰の



第7図 鐘ヶ嶽廃寺と武藏国分寺位置図

山として古くから指摘されている東丹沢の山々に、同じ素弁の軒丸瓦をもつ寺院を建立することで、武藏国司は相模国とのつながりを誇示していたのだろう。

北武藏の窯業生産地は、選地された山林や丘陵は元々神聖視されている場所であり、窯業生産地帯を独占する為に山林資源の独占的な使用と神域への進出という課題があったという（澤口2014）。北武藏のエリアの窯業開発地は古代の郡境や古墳群の境に形成され、「共益地」的な空間で、郡や評の中心とならない土地に窯が立地しており、こうした瓦窯跡群の近隣には初期の古代寺院が所在している。古代において、山林は修行の場でもあり、更に淨域であることから、瓦の生産や仏具の生産が仮の場所を確保する為の行為であるという大義名分をもち、丘陵内部へ開発を行っていったとしている。寺院の建立と窯業生産地の開発は緊密であったという背景が北武藏にはあるが、南武藏の窯業開発地域にこうした様相はみられない。武藏国分寺の再建期の時期に、瓦を調達していた御殿山瓦窯の管理運営者である武藏国司が、国分寺・尼寺の僧侶たちの山林修行の場として相模の地を選地し、東丹沢の地に山林寺院を建立、修行の場としていたと想定される。

4. 瓦塔と御殿山瓦窯との関係は

瓦塔も瓦生産同様、発注者がいて生産される製品であり、誰もが自由に製作可能なものではない。瓦塔は鳩山瓦窯や新沼窯、東海地方では猿投窯等の窯から出土していることから、須恵器工人の関与があるとされている。瓦塔の製作を依頼する発注者は、先にも述べたように、開発を担う集落のシンボル的な存在として瓦塔を信仰対象物として設けたいという意図が考えられ、その時期が9世紀中～後半に集中している。そして、その時期の瓦生産を担っていたのは御殿山瓦窯であったのだろう。

相模国や武藏国で御殿山瓦窯産の瓦が多くみられる傾向は、御殿山瓦窯の生産がピークとなる9世紀後半～10世紀前葉であり、最も流通していた時期に瓦塔の造立も行われていたのだろう。集落遺跡に分布している場合は、瓦を必要とする建物があったか、瓦塔を納めるための構造物があったか、もしくは近隣に瓦を用いる構造物があり、不要となって持ち運ばれたといった判断が必要となる。御殿山瓦窯産を起源とする瓦が伴うのは、先にも述べたように集落遺跡が多く、宮添遺跡、藪根不動原遺跡、寺山中丸遺跡、北金目塚越遺跡、池ノ辺遺跡、などがあげられる。これらの集落内に御堂のような建物があり、仮に建物に葺いていた瓦が御殿山瓦窯産であれば、それが流通していた時期であり、古代寺院以外で御殿山瓦窯産の瓦を入手できるルートがあったことを意味している。ただ、一堂の建物を葺くような量はどの遺跡からも出土しておらず、大棟などに数枚葺くような構造で、シンボル的な意味合いでの使用なのかもしれない。

山林寺院と平地寺院間での同范瓦については、相模・武藏という国を超えて同范関係がみられる稀有な事例ではあるが、この背景には御殿山瓦窯という窯が両国共通の生産窯であり、御殿山瓦窯を基軸とする生産体制が武藏主導のもと行われ、9世紀後半代の相模国の瓦生産体制に武藏国司が関与していたことが同范瓦の関係によって想定される。同范瓦が出土するのは、武藏国司が武藏国分寺や尼寺の僧・尼僧の修行の地として相模国の地を選地し、瓦を供給していたといえるのではないだろうか。国分寺瓦の同范関係が物語っているように、「相模と南武藏」は密接であったといえる。

執筆にあたり、また資料実見等において様々なご教示を賜りました。記して感謝申し上げます。

東真江、新井 悟、荒井秀規、池田敏宏、井出智之、井関文明、稻村繁、宇都洋平、大上周三、大村浩司、岡本孝之、押方みはる、押木弘巳、栗田一生、富永樹之、曾根博明、田尾誠敏、中三川昇、橋口 豊、山口正紀、依田亮一（敬称略）

【註】

- 1 : 鐘ヶ嶽廃寺という遺跡名称はないが、瓦が採集できる地点であることからここでは便宜的に「鐘ヶ嶽廃寺」と呼称する。
- 2 : 平成26年度の伊勢原市の遺跡展示にて実見し、採集瓦として井出智之氏からご教示いただいた。中世瓦と共に採集されるようで、他に素弁の軒丸瓦もあり、東丹沢尾根ルート沿いに瓦葺建物の存在が想定される。
- 3 : 岡上廃堂事例については報文のみの為、出土事例の記載のみとする。
- 4 : 調査担当者である（公財）かながわ考古学財団の山口氏のご教示による。
- 5 : 宮山中里遺跡の瓦塔については報告書作成時に池田敏宏氏よりご教示いただいた。また、愛名宮地遺跡や天神山下城遺跡の時期については、厚木市郷土資料館にて境雅仁氏、佐藤健二氏、寶満龍之介氏のご好意により瓦塔の実見の機会を得、ご教示いただいた。
- 6 : 厚木市教育委員会 佐藤健二氏のご教示による。

【引用・参考文献】

- 荒井秀規 2017『覚醒する〈関東〉平安時代』古代の東国3 吉川弘文館
- 池田敏宏 1999「関東地方瓦塔編年と他地域瓦塔編年の比較・検討—関東地方瓦塔屋蓋部編年の検証作業を中心に—」『研究紀要』第7号 栃木県文化振興事業団埋蔵文化財センター
- 池田敏宏 2000「瓦塔」『古代仏教系遺物集成・関東一考古学の新たなる開拓をめざしてー』考古学から古代を考える会
- 池田敏宏 2004「山野開発と瓦塔の造立—瓦塔造立の背景についての考察ー』『開発と神仏とのかかわり』古代考古学フォーラム2004『古代の社会と環境』帝京大学山梨文化財研究所・古代考古学フォーラム実行委員会
- 石田成年 1997「摨河泉の瓦塔」『河内古文化研究論集』大阪府柏原市古文化研究会編
- 井上尚明 2006「武藏国における村落寺院について」『埼玉の考古学II』埼玉考古第41号埼玉考古学会
- 上原真人 2002「古代の平地寺院と山林寺院」『佛教藝術』265号 特集山岳寺院の考古学的調査 西日本編 毎日新聞社
- 上原真人 2011「国分寺と山林寺院」『国分寺の創建 思想・制度編』須田勉 佐藤信編 吉川弘文館
- 上原真人 2016「国境(くにざかい)の山寺—石清水八番宮前身寺院に関する憶測ー』『京都府埋蔵文化財論集』第7集—創立35周年記念誌ー 公益財団法人京都府埋蔵文化財調査研究センター
- 牛山佳幸 2012「山寺の概念」『季刊 考古学』第121号 特集 山寺の考古学 山寺の空間・山寺の諸相・山寺をめぐる諸問題 雄山閣
- 大島慎一・田尾誠敏 2000『千代北町遺跡 第VII地点』小田原市文化財調査報告書第82集 小田原市教育委員会
- 大坪宣雄 2000「民間における仏教の受容—神奈川県内の村落内寺院と火葬墓ー』『かながわの古代寺院』神奈川県考古学会 考古学講座 神奈川県考古学会
- 大坪宣雄他 2007『藪根不動原遺跡』藪根不動原遺跡発掘調査団
- 大村浩司他 2013『神奈川県茅ヶ崎市 下寺尾官衙遺跡群の調査～下寺尾七道伽藍跡・高座郡衙の調査～』茅ヶ崎市埋蔵文化財調査報告40 茅ヶ崎市教育委員会
- 小田原市教育委員会 2008『千代遺跡群—千代台地にひろがる原始・古代の遺跡ー』小田原の遺跡探訪シリーズ3
- 加藤芳明・富永樹之 2000「厚木市七沢の鐘ヶ嶽採集の瓦について」『神奈川考古』第36号 神奈川考古同人会
- 神奈川県立歴史博物館 2008『特別展 瓦が語るかながわの古代寺院』
- 神奈川県考古学会 2000『かながわの古代寺院』
- 神奈川県教育委員会 2014『発掘された御仏と仏具—神奈川の古代・中世の仏教信仰ー』平成26年度かながわの遺跡展・巡回展
- 梶原義実 2002「最古の官営山寺・崇福寺(滋賀県)ーその造営と維持ー」『佛教藝術』265号 特集 山岳寺院の考古学的調査 西日本編 每日新聞社
- 梶原義実 2012「尾張における古代寺院の動向」『尾張・三河の古墳と古代社会』同成社
- 上高津貝塚ふるさと歴史の広場 1998『仏のすまう空間—古代霞ヶ浦の仏教信仰ー』
- 川崎市育委員会 1981『川崎市高津区野川 影向寺文化財総合調査報告書[寺院址]』
- 河野一也 1993「奈良時代寺院成立の一端について(IV) 相模国足下群千代廃寺の古瓦を中心として」『神奈川考古』第29号 神奈川考古同人会
- 関東古瓦研究会 1984『第8回 関東古瓦研究会 相模編』

相模・武藏における山林寺院の様相について

- 久保哲三・柳谷 博 1989『矢掛・久保遺跡の調査』矢掛・久保遺跡調査会
考古学から古代を考える会 2000『古代仏教系遺物集成・関東—考古学の新たなる開拓をめざして—』
後藤健一 2007『大知波峠廃寺跡』日本の遺跡22 同成社
後藤健一 2012「国分寺と山寺」『季刊 考古学』第121号 特集 山寺の考古学 山寺の空間・山寺の諸相・山寺をめぐる諸問題 雄山閣
坂田敏行 2009「製作技法・表現手法からみる東日本出土瓦塔」『研究紀要』第24号 財団法人 埼玉県埋蔵文化財調査事業団
笛生 衛 2012「第2章 瓦塔の景観と滅罪の信仰—瓦塔が建てられた景観と經典との関連を中心に—」『日本古代の祭祀考古学』 吉川弘文館
澤口和正 2014「窯業生産地と古代の仏教」『古代の開発と地域の力』古代東国の考古学3 高志書院
宍戸信吾他 2000『坪ノ内・宮ノ前遺跡(No.16・17)』かながわ考古学財団調査報告77 財団法人 かながわ考古学財団
須田 勉 2002「国分寺と山林寺院・村落寺院」『國土館史學』第10号
高崎光司 1989「瓦塔小考」『考古学雑誌』第74巻第3号 日本考古学会
高橋 香 2014「相模における国分寺造営以降の瓦生産体制について—国分寺・国府・国内諸寺間における瓦工人の動向について—」『かながわの考古学』研究紀要19 公益財団法人かながわ考古学財団
高橋 香 2017「鐘ヶ嶽採集瓦と武藏国分寺の同范瓦について」『厚木市史たより』第16号 厚木市教育委員会
竹花宏之 2012「多摩丘陵における瓦窯について—多摩ニュータウン遺跡群を中心として—」『研究論集 XXVI 東京を掘る—東京都埋蔵文化財センター30周年の軌跡—』 財団法人東京都スポーツ文化事業団 東京都埋蔵文化財センター
玉口時雄・大坪宣雄 1995『黒川地区遺跡群報告書VII 宮添遺跡—奈良・平安編—』黒川地区遺跡調査団
近野正幸 2000『神明久保遺跡』かながわ考古学財団調査報告103 財団法人かながわ考古学財団
鶴間正昭 2012「須恵器生産の特徴と系譜」『研究論集 XXVI 東京を掘る—東京都埋蔵文化財センター30周年の軌跡—』 財団法人東京都スポーツ文化事業団 東京都埋蔵文化財センター
鶴間正昭 2014「国府を支えた手工業生産—武藏国府とその周辺—」『古代の開発と地域の力』古代東国の考古学3 高志書院
帝京大学山梨文化財研究所/山梨県考古学協会 2003『遺跡の中のカミ・ホトケ』古代考古学フォーラム古代の社会と環境
栃木県立しづつ風土記の丘資料館 1999『仏堂のある風景—古代のムラと仏教信仰—』
富永樹之 1994~1996「村落内寺院の展開(上)~(下)」『神奈川考古』第30~32巻 神奈川考古同人会
永井邦仁 2005「東海地方の古代瓦塔に関する覚え書」『三河考古』15 三河考古刊行会
永井邦仁 2006「東海地方の古代瓦塔研究ノオト」『研究紀要』第7号 財団法人愛知県教育・スポーツ振興財団 愛知県埋蔵文化財センター
永井邦仁 2008「猿投窯型瓦塔の展開(1) —信濃の猿投窯型瓦塔—」『研究紀要』第8号 財団法人愛知県教育・スポーツ振興財団 愛知県埋蔵文化財センター
永井邦仁 2009「猿投窯型瓦塔の展開(2)」『研究紀要』第9号 財団法人愛知県教育・スポーツ振興財団 愛知県埋蔵文化財センター
永井邦仁 2013「古代東海地域における瓦塔の造立とその背景」『技術と交流の考古学』同成社
松本修自 1985「小さな建築」『文化財論叢』奈良国立文化財研究所
日野一郎・境 雅仁 1999『愛名宮地遺跡 県営厚木愛名団地に伴う発掘調査報告書』愛名宮地遺跡調査団
服部敬史・河合英夫他 2011「南多摩窯跡群須恵器編年の暦年代検討」『八王子市史』創刊号 八王子市史編集委員会
深澤靖幸 2015「第5章 文化をまとめ、生きようとした時代」『新八王子市史 通史編1 原始・古代』 八王子市史編集委員会
古川 登 2012「明寺山廃寺」『季刊 考古学』第121号 特集 山寺の考古学 山寺の空間・山寺の諸相・山寺をめぐる諸問題 雄山閣
吉田美弥子 2001「5 瓦の諸問題(1) 御殿山支群出土の軒丸瓦について」『南多摩窯跡群 八王子みなみ野シティ内における古代窯跡の発掘調査報告』IV 八王子市南部地区遺跡調査会

【図版出展】

- 第1図 筆者作成
- 第2図 池田2004より引用
- 第3図 池田2004より引用一部加筆
- 第4図 川崎市教委1981、近野2000、池田2000、大村2013より引用作成
- 第5図 久保他1989、玉口他1995、日野他1999、宍戸他2000、池田2000、大坪2007より引用作成
- 第6図 高橋2017より引用
- 第7図 高橋2017より引用一部改変・加筆